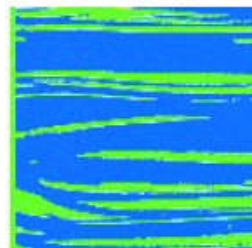


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2009年 夏号 No.55 (2009年10月20日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

2009年度日本行動分析学会第27回年次大会および総会を終えて…………… 理事長 藤 健一
日本行動分析学会2009年度事業計画…………… 事務局
日本行動分析学会第27回年次大会を開催して…………… 野呂文行
論文賞を受賞して…………… 奥田健次
行動理論に感謝しています…………… 武田 建
第7回実践候補者公募のお知らせ…………… 研究教育推進委員会
変異と選択：基礎と応用のはざまに…………… 林 裕介
2010年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」応募要項…………… 広報委員会
編集後記…………… ニューズレター編集部

2009年度日本行動分析学会第27回年次大会

および総会を終えて

理事長 藤 健一

今年の秋空は例年よりも早い季節の到来を感じさせますが、会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

さて、去る7月10日から12日までの3日間、筑波大学において、第27回年次大会が開催されました。今年は例年よりやや早めの開催となりましたが、350名を超す大会参加がありました。今回は3日間の会期中、特別講演2件、シンポジウム4件、その他にもポスターセッション、教育セッションが行われ、各会場では文字通り熱のこもった討論や、意見の交換がなされました。大会2日目には学会賞の授賞式があり、実

践賞受賞の武田建先生が「行動理論とコーチング」について、また論文賞受賞の奥田健次先生が「不登校問題の行動分析学による理解と援助」についてそれぞれ受賞の記念講演をなさいました。

大会2日目の総会は、筑波大学大学会館ホールにおいて開催されました。2008年度の事業と決算について報告があり、承認されました。続いて2009年度事業計画方針、および各委員会の事業計画方針が提案され、承認を戴きました。さらに、来年の年次大会を神戸親和女子大学(準備委員長 吉野俊彦先生)で開

催することが紹介されました。

今期理事会の方針につきましては、J-ABA ニュースの春号 (No. 54) にも 2009 年度方針を含めて述べましたので、ここでは概略を述べるにとどめたいと思いますが、次の 2 つの目標については改めて強調を致したいと思います。一つは、「行動分析学会の進展と教育の普及を担う学会として、その運営形態をより洗練するとともに、学会の基盤をより強固にすること」であり、もう一つは「日本行動分析学会創立三十年記念事業の準備」です。年次大会後の 10 月 3 日に開催された常任理事会におきまして、この承認された事業計画方針に従い、編集委員会は「行動分析学研究」の新方式による査読・編集について、出版企画委員会からは 2 つの新企画の提案があり、また創立三十年記念事業についても準備的な検討を開始するなど、今期初年度の活動を順次本格化しております。

今回の年次大会では、参加した一般正会員は一般正会員の約 27% であり、学生正会員は同じく約 36% が出席参加をしていました。近年は、若い大学院生の会員の参加が目立つようになり、これからの行動分析学会や行動分析学の発展を思うと大変心強く感ぜられます。行動分析学会は、こういった若い会員の大会参加を促し、そして大会において会員自身が強化されるだけではなく、会員自身が他の本会員や非会員にとっても弁別刺激や強化刺激として機能するような学会となるよう、今年を含めた 3 年間で可能な限り近づけたいものと思います。

最後に、第 27 回年次大会実行委員会の園山繁樹委員長、野呂文行事務局長をはじめとする実行委員会の皆様、厚く感謝の意を表したいと思います。有り難うございました。

日本行動分析学会 2009 年度事業計画

事務局

以下の事業計画案が、2009 年 7 月 11 日の会務総会にて承認されました。

機関誌編集委員会

- (1) 「行動分析学研究」の年 2 回刊行
- (2) 編集業務の外部委託についての研究と実施スケジュールの検討
- (3) 安定的投稿数の確保の方策確立

研究教育推進委員会

- (1) 学会企画シンポジウムなどの立案と実施
- (2) 教育セッションの立案と実施

出版企画委員会

- (1) 出版企画の継続分（藤田企画・前委員会企画）の促進
- (2) 新規出版企画の提案

広報委員会

- (1) 「ニュースレター」の年 4 回刊行
- (2) 学会 HP の随時更新
- (3) 学生会員の海外学会参加助成事業および ABA I 窓口

倫理委員会

- (1) 倫理委員会活動
- (2) 倫理についての広報活動

年次大会企画委員会

- (1) 年次大会開催方式の研究と提案
- (2) 年次大会開催にかかわる各種業務の支援
- (3) 年次大会における各種学会企画の実施

事務局

- (1) 総会・理事会・常任理事会など諸会議の

準備・運営

(4) 著作権の管理

(2) 各種資料の収集・分析・保存

以上

(3) 収入・支出の管理

日本行動分析学会第27回年次大会を開催して

第27回年次大会事務局長 野呂 文行（筑波大学）

「来年度、行動分析学会の年次大会の開催を依頼されて……。先生、事務局長やってくれますか」

園山先生から、そのようなお話があったのが、確か、昨年度の第26回大会の直前だったと思います。

私自身は、「年次大会を筑波大学で開催することは、当分の間、ないのではないかと勝手に考えていました。と申しますのも、園山先生が2001年に西南女学院大学で大会委員長を務められていたからです。でも、そのおかげで、園山先生がいろいろと大会準備のノウハウをお持ちでしたので、事務局長であった私は、あまり大変な思いもせずに、準備作業をすることができました。

基本的な準備は、園山先生と相談して、二人で進めていきました。印刷・発送作業は、すべて業者に委託し、会員との連絡等はWEBやメールを通じて行いました（WEBの管理はすべて園山先生任せです）。あと、細々したことは、研究室の学生さんにもお手伝いしてもらいました。ですから、それほど苦勞をせずに準備をすることができました（周囲の人が苦勞をしていたのかもしれませんが……）。

そんな私ですが、年次大会を開催するに当たり、心配した点がありました。

①新型インフルエンザ：大会開催前（6月頃）は、つくば市で感染者が出れば、大学を閉鎖するという状況でした。もしそのような事態にな

れば、会場が使用できなくなり、大会が中止になるという状況でした。幸いにも、そのような事態にはならなかったのですが、その点が心配でした（でも、一番心配していたのは園山先生で、その対応等も先生がやってくれました）。

②参加者数：どの年次大会も同様であると思いますが、参加者の数が一番心配でした。これまでの年次大会は、夏休み中に開催されることが多かったのですが、今回は使用する会場の空き状況との関係（夏休み中は、教員免許状更新講習で使用）で、7月の上旬になりました。学校の先生などは、夏休み前の学期末のお忙しい時期でもあり、参加される先生が少なくなるのではないかと感じておりました。

また、「学会の情報を多くの人に知らせたい」ということで、一般参加の企画を多くしました。気がついたら、自主シンポジウムなどほとんどの企画が無料で公開されることになりました。情報の公開という点では望ましいのですが、「参加費が集まらなかったらどうしよう」と直前まで心配をしておりました。

ご参加いただいた皆様のおかげで、このような心配もすべて杞憂に終わり、また大きなトラブルもなく、大会を終えることができました。また年次大会の開催を担当することで、年次大会がどのように運営されているのか、などがよく分かり、私自身も勉強になりました。本当にありがとうございました。

<第4回論文賞>

論文賞を受賞して

奥田 健次（桜花学園大学）

このたびの受賞は、まったく思いがけないものだった。後になって気づいたことだが、論文賞投票用紙が入っているという学会の封筒と、理事選挙の用紙の入った封筒がここに。この2つの封筒は、今でも私の研究室で未開封のままである。

確かに、受賞論文については『教科書的』といえる介入計画であり、臨床的にも有意義な成果をもたらした。そういう点で、この論文が本学会で評価されたのであろう。

ただ、次のような批判も聞こえてきそうである。「すべての不登校に使えないでしょ」「もっと複雑な要因が絡む事例はどうするの？」などといったものである。実際、こうした批判的質問は講演などで直接耳にすることもしばしばある。しかしながら、これらは的外れな批判である（ちなみに、こうした的外れな批判は根っからの文系か、臨床系の人に多い）。本論文は、すべての不登校に使える何かを提案しようとしたものではない。トークンを使って再登校を促すことのできる事例もあるのであって、それを同時期に複数介入できたので発表した。この程度の成果ならば、他にも日常的に粛々と実践している。一方、「複雑な要因」とか「より困難な事例」というのであれば、これもまた日常の仕事において大いに奮闘している。一つひとつの事例があまりにも特徴的すぎて、許可を得て発表するのが難しいという事情もある。今後、検討していくべき課題である。

こんな話を聞いたことがある。東北のある村に、必ず雨を降らせることのできる『雨乞いの儀式』があるという。実は、私自身、この『雨

乞いの儀式』を会得している。このことを、医師や心理士に信じるかどうか聞いてみると面白い。ほとんどの方が信じてくれない。「奥田先生なら何かできそうだ」と思われるのも気味が悪い話なので、それでよいと思う。しかし、私には本当にこの『雨乞いの儀式』をやって雨を降らせることができるのである。東北のある村のこの『雨乞いの儀式』のからくりは、「雨が降るまで続けること」なのである。日照りの続いた東北にも、いつか恵みの雨は降るのである。

私は、自分の臨床活動をこの雨乞いにたとえることがある。複雑な要因だから難しいというのではなく、問題を細かいパーツに分解して、一つずつターゲットを決めて介入していく。そしてそれを問題が解決するまで続けていく。ただし、やみくもに介入を続けるのではなく、行動分析学の良い所を活かして、データを取りながら介入効果を実験的に見ていく。いつか降る雨を何もせず待たなければならない。

今回受賞した論文は応用系だったにもかかわらず、基礎系の先生方にもたくさんお祝いの言葉をいただいた。人間がしでかす複雑そうな問題について、それに日夜「ああでもない、こうでもない」と真剣に取り組んでいる方々は、どうなのだろうか。なぜ、この人たちの多くが「人間の行動はそんな単純なものじゃない！」と言うのだろうか。複雑そうな問題に出くわしたとたん、基礎理論がゆらぐものは「悪い科学 (bad science)」である。その点、行動分析学は心理学の諸体系の中で、もっとも「良い科学 (good science)」たりえる。臨床分野においては、新しい理論や仮説を構築していくことには慎重で

あるべきで、行動分析学を応用する者としては、
テクノロジーの発展に一層の努力を傾注すべき
だろう。

<第6回実践賞>

行動理論に感謝しています

武田 建（関西福祉科学大学）

私は関西学院大学在職中、アメリカンフットボール部のコーチにうつつを抜かし、その合間に授業をする悪質な教員でした。その私がこの学会から表彰して戴き、ただただ恐縮しています。

駆け出しの頃、私は怒鳴って、叱って、選手を追いまわす鬼のようなコーチでした。「悪いプレーを減らそう」としたのです。しかし、行動理論に触れて「良いプレーが増えれば、悪いプレーは減る」ことを教わりました。そこで「良いプレーを誉めよう」としたのですがなかなか出来ません。マネージャーに私の教え方をチェックしてもらおうと、相変わらず叱ってばかりで、誉める回数のごく僅かでした。

理由は沢山あります。その1つは、要求水準が高すぎたのです。平均的な能力の選手に、スーパープレーを望んでいました。選手たちはセリグマンの犬のようになりそうでした。日本一を狙う前に、まずリーグの初戦に勝とうと目標を切り替えました。

難しいパスを受けさす前に、まずやさしいパスを捕ることから始めました。また「高いボールを投げるぞ」と予告してから投げました。捕れたら「上手いぞ、ナイスキャッチ」です。落

としたら「次は、捕ろう」と励ましました。昔私に怒鳴られたOBたちは「幼稚園のようだ」と笑いました。しかし、勝ち星を重ねるうちに「幼稚園の指導法」はチームに定着しました。

投げるとか受けるのは一連の動きです。それを全部続けてやらそうとするから難しいのです。部分ごとに区切ってやらせれば、比較的簡単です。そして、1 つずつ繋いでゆき、最後に全部をやらすときには、「ゆっくりでいいから正確に」と言うと、かえって上達が早かったようです。低いボールをダイビングキャッチするのは勇気がいります。そこで、グラウンドの上にひざまずかせて、1メートル離れてボールをそっとトスしました。これなら痛くも怖くもありません。低いボールを受ける最後のところを経験させた効果は、学生王座決定戦で現れました。

今日も私は孫のような選手に、「ボールを見て」「手の中にはいるまで」「ナイスキャッチ」と毎回叫んでいました。練習の帰りに喉が痛くて風邪かと思いました。でも、原因は大声で手がかり刺激を与え、誉めていたからです。先輩や同僚から習った行動理論が、沢山の優勝をもたらしてくれたと心から感謝しています。

第7回実践賞候補者公募のお知らせ

研究教育推進委員会

実践賞の候補者推薦は、常時、受け付けております。社会的な課題に、行動分析学を応用して取り組んでいる個人や組織をご推薦下さい。

候補者は非会員でもかまいません。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも対象となります。推薦の締切は2月末日です。推薦に必要な書式は、学会 web サイトからダウンロードできます。

なお、参考までに、歴代の受賞者は以下の通りです。

第1回(2003)：高畑庄蔵氏(当時、富山大学教育学部附属養護学校)

第2回(2004)：野口幸弘氏(大野城すばる園)

第3回(2005)：山崎裕司氏(高知リハビリテーション学院)

第4回(2006)：勿田文記氏(国立職業リハビリテーションセンター)
アニマルファンシィアーズクラブ
京都市立総合支援学校(全7校)

第5回(2007)：受賞者なし

第6回(2008)：武田 建氏(関西学院大学)

学会賞の目的や選考方法などについては学会 web サイトの「学会賞：論文賞規定」をご覧ください。学会賞に関するお問い合わせは、担当理事(浅野、井澤)までどうぞ。

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職>

変異と選択：基礎と応用のはざまに

林 裕介

(Life Span Institute at Parsons, University of Kansas)

1. 初めに- 行動分析学との出会い

学部3年生に進学したばかりの当時史学科に在籍していた私は、「たまたま」空いてしまった水曜日の3限を埋めるべく履修案内に目を通していました。そんな折、杉山尚子先生の「人間科学特論：行動分析学入門」なる授業を見つけました。あまり心理学等には興味はなかったのですが、何となく初回の授業に出席してみたのが私と行動分析学の出会いでした。この気まぐれを強力に選択して下さった杉山先生にお会いするという幸運に恵まれたが故に、こうして私は現在この文章を書いております。

この授業でどっぷり行動分析学にはまった私は、自分の将来の身の振り方に大いに悩んだあげく、1年休学してアメリカで行動分析学を学ぶことにしました。杉山先生に留学先のご相談に行った際、持参した資料の中に「たまたま」ウェスタンミシガン大学が入っているのを先生が発見された瞬間に、私の留学先は決まりました。

2. 留学、就職、そしてまた留学

ウェスタンミシガン大学で学部の授業をいくつか履修し、行動分析学に心底はまった私は大

学院への進学を決意しました。特に興味を持ったのは行動組織マネジメント (OBM) でした。学部終了後すぐ進学することも考えたのですが、様々な方から一度社会人経験を積んでからの方が良いというご助言を頂き、約3年間ほどシステムエンジニアとして会社勤めをしました。そして長い回り道の末に、ノーステキサス大学の行動分析学部の修士課程へ進学しました。

3. ノーステキサス大学修士課程

同大学の行動分析学部には修士課程のみが存在し、卒業生の多くは応用行動分析学の分野で仕事に就きます。私の当初の興味も OBM だったのですが、研究法の授業でデザインした基礎実験が「たまたま」盛り上がってしまい、誘われるがままに OBM と平行してヒトの刺激性制御の基礎実験を始めました。私のこの何回目かの変異を不可逆的に選択したのは、私の指導教官となった Dr. Manish Vaidya でした。彼は「臨床家であれ実験屋であれ、環境内の変数を分析的 (analytic) に見ることができなくてはならない。臨床の良いトレーニングにもなるから基礎実験をやれ」(註: 意識です) と言って、私を基礎の世界のさらに奥深くへと誘いました。そしてある日、彼は「これは読んどけ」と言って一冊の論文のコピーを手渡しました。それは Saunders と Spradlin によって書かれた、条件性弁別の獲得の必要十分条件を事細かに分析したものでした (Saunders & Spradlin, 1989)。私はこの JEAB の論文が、たいそう臨床に役立つようなことに驚きました。そしてその手続きを私が当時トレーニングをしていた自閉症児で試してみたところ、さっくりと条件性弁別を教えることができてしまい、さらにまた驚きました。ただ何より私を惹きつけたのは、その論文の、条件性弁別の獲得における制御変数をストイックなまでに特定していこうとする姿勢でした。Saunders は現在の私の師匠ですので手前味噌で申し訳ありませんが、「いい仕事するなあ」と(偉そうにも) 感心しました。そしてこの Saunders

がとった「行動の原理をまずはしっかりと基礎実験で把握し、そこから論理的な帰結として教授法を捻り出す」とでもいった理屈っぽいアプローチは、理屈っぽい私には大変魅力的に映り、将来こういう研究をしてみたいと強く思いました。この頃だったと思いますが、気がつけば、私の興味は基礎研究、特に臨床上重要な問題を基礎研究の文脈で扱う、いわゆる「トランスレーショナル・リサーチ」なるものに移っていました。

4. ウェスト・バージニア大学博士課程

すっかり基礎研究に陶醉し、ハトの般性見本合わせて修士論文を書いた私は、Dr. Vaidya の薦めもあり、ウェスト・バージニア大学の心理学部の博士課程へ進学しました。指導教官には、Dr. Michael Perone を選びました。理由は、彼の強化後反応休止に関する基礎研究 (Perone & Courtney, 1992) の応用分野への「トランスレーション」に興味があったからです。そしてこれは後に述べますが、現在の私のポストクの仕事に関係します。

ウェスト・バージニア大学の研究に関するトレーニングの特色としては、複数の研究室に所属することが推奨されている点があります (ちなみにノーステキサス大学もそうでした)。私は Dr. Perone の研究室のほか、Dr. Andy Lattal の基礎系の研究室と Dr. Claire St. Peter-Pipkin の応用系の研究室に所属していました。もう一つの特色としては、Preliminary Exam という博士論文を書く資格を得るための試験が課されることがあります。厳密にはこれはただの試験なのですが、学生自らがその試験を常に意識せざるを得ないという点でトレーニングの重要な役割を果たしているとも言えます。試験は理論系と実験系の2種類があり、両方とお題を2つもらいそのうちの一方についての論文、ならびに詳細な実験計画書を一週間で仕上げるといふものです。特に実験系の試験は、わざわざ試験を受ける学生が良く知らない分野の

お題が出るのが慣例です。私もまさに地獄のような一週間を二度ほど経験し、それ以来どんなに忙しくても「あの時の一週間よりはまし」と自分を慰め、淡々と研究を進めるようになりました。意外とこれが学生の生産性の向上に寄与し、それこそが実はこの試験の真の狙いなのではないかと私は勘繰っています。

博士論文のみを残したウェスト・バージニア大学での最後の年に、私はまたしても自分の研究の分野に関する変異を経験しました。大学のあるモーガントウンという街に、米国疾病予防管理センター (CDC) の一機関であるアメリカ国立労働安全衛生研究所 (NIOSH) というものがあるのですが、そこに pre-doctoral training (インターンのようなものです) の仕事がないかと聞いてみたところ「たまたま」仕事があり、そこで雇ってもらえることになりました。私が参加したプロジェクトは行動毒性学ならびに行動薬理学に関するもので、心理学者は私と私の上司だけで、その他は神経科学や化学を専門とする科学者でした。ここでの経験は大変刺激的で、今までの私の変異と選択の歴史からすると専門分野をシフトさせるところだったのですが、悩みに悩んだ末にこの偶然を活用しないことになりました。そして博士論文をなんとか完成させ、カンザス大学のパーソンズ研究所でポストドクとしてのトレーニングを始めました。

4. カンザス大学ポストドク、ならびに終わりに

私の現在の師匠は Dr. Kate Saunders と Dr. Dean Williams です。両者とも一応カンザス大

学に所属していますが、アメリカ国立衛生研究所 (NIH) 等から研究費を獲得し研究を行うことのみが仕事です。Dr. Saunders のもとでは、刺激性制御の観点からテクスチュアルの獲得の制御変数を特定するプロジェクトに、そして Dr. Williams のもとでは前述の強化後反応休止の基礎研究から発展した、課題間の移行を円滑に行うための技法の確立するプロジェクトに携わっている、というのが私の近況です。

こうして振り返ってみると、よくもまあいろいろなものに手を出したものだと思いますが、私の専門分野に関する気まぐれな変異は、さまざまな紆余曲折を経てようやく最後に基礎と応用のニッチに収束しました。今後はこの分野で腰を落ち着かせて、なんとか研究者として一人前になれるよう努めていこうと思っています。

参考文献

- Perone, M., & Courtney, K. (1992). Fixed-ratio pausing: Joint effects of past reinforcer magnitude and stimuli correlated with upcoming magnitude. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 57, 33-46.
- Saunders, K. J., & Spradlin, J. E. (1989). Conditional discrimination in mentally retarded adults: The effect of training the component simple discriminations. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 52, 1-12.

2010 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加 に対する助成事業」応募要項

広報委員会

日本行動分析学会は、1983 年の創立以来、行動分析学の発展に寄与してきましたが、創立 20 周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABAI への参加を助成する事業を開始しました。さらに 2007 年度からは、事業を発展させ、SQAB への参加も助成対象に含めることに致しました。学生会員の奮っての応募を期待します。

<応募資格>

1. 2010 年 5 月に米国サンアントニオで開催される ABAI または SQAB に発表を申込んだ者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAI Expo、同窓会 (reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。
3. 2009 年 4 月 1 日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB 参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABA が募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。
4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けていない者。

<提出書類>

1. 規定の応募用紙に必要事項を書き込んだもの。応募用紙は、ニューズレター、ホームページあるいは学会事務局からも入手できる。
2. ABAI/SQAB に提出した発表申込書を印刷したもの
3. ABAI/SQAB が発行する発表受理書を印刷したもの

<助成額>

応募者の中から、抽選により 2 名に対し、1 名につき 75,000 円を支給する。ただし、受給後、ABAI/SQAB に参加を取りやめた者は返金しなければならない。この場合は、再抽選を行なう。

<応募締切>

2010 年 3 月 31 日消印有効。4 月以降に開催する最初の（常任）理事会において公開抽選を行い、当選者に通知する。

<提出先>

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部心理学研究室気付
日本行動分析学会事務局

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

http://www.j-aba.jp

2010年 月 日

2010年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」
申請用紙

氏名： (英字表記)	
所属： (英字表記)	
E-mail:	
発表の種別：	<input type="checkbox"/> 口頭発表 <input type="checkbox"/> ポスター発表 <input type="checkbox"/> シンポジウム <input type="checkbox"/> パネルディスカッション
発表タイトル：	
指導教員の 署名：	<p>私_____は、申請者_____が、 _____大学に所属する私の指導学生で あることを証明します。</p> <p style="text-align: right;">2010年 月 日</p> <p>氏名： _____ 印</p> <p>所属 _____</p>

学会記入欄	
受理月日	受理番号
月 日	

編集後記

夏号というにはもうずいぶん涼しくなってきました。今号では年次大会で受賞講演をいただいた奥田先生と武田先生にご寄稿いただきました。大会に参加されなかった会員にもそのご業績の内容の一端を知っていただけるものです。

また、前号より連載の始まった「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」には、林祐介氏にご寄稿いただきました。学部時代は史学科に籍を置かれ、杉山尚子先生の授業に出席したことがまさに人生のターニングポイントであった、とのことでした。

ニューズレターには会員の皆様からの投稿もお待ちしています。ご自分の仕事のこと、地域での研究会のこと、学会に貢献された方の消息等、編集部まで原稿をお寄せください。掲載の可否については編集部で決定させていただきます。

7月の年次大会の際に心配した新型等A型インフルエンザの感染状況は、寒さが深まるにつれて一層心配されます。会員の皆様にもご健康に留意されますようお願いいたします。

次の秋号は12月初めに発行予定で、担当は野呂委員になります。(園)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
園山 繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp